

東北地方の細石器文化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢島, 國雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8645

東北地方の細石器文化

矢 島 國 雄

一、はじめに

本州北半部における細石器文化の研究は、新潟県荒屋遺跡の調査（芹沢 一九五九）によって開始されるが、東北地方は長く資料的には空白地域であったと言える。湧別技法、荒屋型彫器をめぐる芹沢長介、吉崎昌一の所論の展開（芹沢 一九五八・一九五九・一九六一・一九六三、吉沢・吉崎 一九五九、吉崎 一九六三）に対して、滝沢浩が東北地方は資料的には『真空地帯』であるとして、北海道から本州北半部を大きく一つの文化圏とみなすことに警鐘を鳴らしたこと（滝沢 一九六四）が端的にこの事情を物語ると言えよう。

こうした滝沢浩の疑問が解決されるにはなお若干の時間が必要であった。一九七〇～七一年に加藤稔らは山形県角二山遺跡（加藤 一九七一、上野 一九七一など）、同越中山S遺跡（加藤 一九七二、小野 一九七三など）を相次いで調査し、湧別技法をもつ細石刃石器群と荒屋遺跡の細石刃石器群と関係する石器群を明らかにした。東北地方における細石器文化研究の本格的胎動が開始されたといえよう。以後、青森、秋田、岩手、福島各県での調査例が報じられ、ようやく発見的段階を脱け出しつつある感が強い。

東北地方の細石器文化は、既知の石器群に関する限り細石刃文化と言い換えても良いであろう。⁽¹⁾以下、それ等の細石刃石器群について若干の検討を加え、私見を述べてみたい。諸賢の御叱正と御教示をお願いしたい。

二、東北地方の細石刃石器群

東北地方における既知の細石刃石器群は現在では十指に余るが、発掘調査によるもの、石器群の内容を十分に検討し得るものは比較的少ない。

一、青森県大平山元Ⅱ遺跡（岩本他 一九七八）

青森県東津軽郡蟹田町大字大平字山元に所在する。報文によれば文化層は二層あり、このうち上層は舟底形石器、両面調整の尖頭器、片面調整の尖頭器、彫器、搔器等を組成とする。下層は尖頭器、彫器、ナイフ形石器等である。上・下層ともに細石刃の出土は報告されていない。

しかしながら、上層の舟底形石器と報告されているもののなかには、数条の槌状剝離をもつものがあり、この一部は細石刃核の疑いがある。同報文第7図1（第二図五）などは細石刃核と考えられないであろうか。また、同報文図版10の11に提示されている接合資料は、舟底形石器の製作技術を示すものとして提示されているが、前述の如く、舟底形石器と報告されているものの一部に細石刃核を含むとすれば、それ等の製作技術をも示す存在なのではあるまいか。

さらに、報告者も指摘しているところであるが、下層に顕著な大形両面調整の尖頭器を素材とした『男女倉型彫器』に類似したものは、湧別技法との関連を示唆する存在なのではあるまいか。

上・下層ともに、細石刃の出土が報じられていないため断定し得ないが、私見では上層は細石刃石器群の可能性が強いと考えている。

二、秋田県米ヶ森遺跡（富樫他 一九七七）

秋田県仙北郡協和町荒川字新田表に所在する。三十点ほどの細石刃と細石刃核の疑いのある石核が報告されている。米ヶ森石器群の主体をなす部分は『大形のナイフ形石器、米ヶ森型合形石器、神山型彫刻刀、エンド・スクレーパーなどを組成とする石器群』であり、『ユニット』を異にして細石刃が出土している。報告者は両者の共伴の可能性を示唆しているが、現状ではナイフ形石器、神山型彫器との共伴を積極的に支持することにはやや無理があろう。

三、岩手県大台野遺跡(菊地 一九七五)

岩手県和賀郡湯田町湯田に所在する。文化層は八層あり、このうちⅠe文化層が細石刃石器群で、細石刃六二点、搔器三点、細石刃核一点、小形石核二点などが出土している。細石刃核は、所謂「半円錐形細石刃核」であり、両設打面である。

四、山形県角二山遺跡(加藤 一九七一、一九七三、加藤・上野 一九七三、上野 一九七一、宇野・上野一九七五)

山形県北村上郡大石田大字大石田字上ノ原に所在する。石器組成は、『細石刃約一三〇〇点、彫刻刀四二点、搔器約四〇点、揉錐具三点、削器五点、舟底形細石刃核一五点、稜つきスポール一四点、スキー状スポール二四点、半円錐形細石刃核一点、同打面再生剥片二点、石核、礫器、砧形石製品、磨石、台石など総計約五七〇〇点』と報じられている。

細石刃の大きさは、幅七ミリメートル、長さ三〜四センチメートルに集中するようで、比較的大形であると言つてよいであろう。

舟底形細石刃核(第一図一・二)は、両面体の素材を製作し、これから稜つきの削片とスキー状削片数本を素材の長軸に沿つて剥離して作出する。所謂「湧別技法」(吉崎 一九六一)によるものである。打面に擦痕をもたないこと、比較的大形であることなどから「札滑型」の細石刃核と規定されている(渡辺 一九七七)。角二山遺跡例の場合、稜つきの削片、スキー状削片の剥離と交互に、削片の剥離面から器体側面の調整加工が繰り返され、また、しばしば細石刃剥離の行なわれる石核端部の調整加工も行なわれている。湧別技法によること、打面に擦痕を持たないことあわせて注意すべき製作技術である。

また、角二山遺跡の石器群には、休場、矢出川遺跡例などに代表される西南日本に一般的に認められる「半円錐形細石刃核」(第二図六)とその打面再生剥片が存在し、細石刃製作技術は二つの異なるものが共存していたことを示している。

他の石器組成では、彫器は荒屋型彫器が主体をなし、搔器は腹面にも刃部の調整のある特徴的なものがあるなど注目される。上野秀一によれば、これ等の彫器、搔器、削器、揉錐などの石器は『平沢良型』に類似した石核の削片を

素材とすると説明される(上野 一九七五)。

五、山形県越中山S遺跡(加藤 一九七二、一九七三、一九七五、小野 一九七三、加藤・上野 一九七三)

山形県東田川郡朝日村に所在する。石器組成は細石刃、舟底形細石刃核、稜つきの削片、彫器、搔器、削器、石刃、ナイフ形石器、搔錐器、彫器削片、石核、尖頭形石器などである。

細石刃は角二山遺跡例に比べ、かなり小形であり、細石刃核の大きさに対応する。

細石刃核は全て舟底形であるが、湧別技法によるものではない(第二図二・三・四)。稜つきの削片は存在するが、スキー状削片は全く出土していないこと、細石刃核の打面の剝離方向が細石刃核の長軸に対して横および斜め方向のものがあること、打面にポジティブバルブの認められるものがあることなどで判断される。加藤稔、上野秀一らは、この細石刃核の製作技術は、大塚和義のいう「荒屋技法」(大塚 一九六八)に近似したものとしている。「荒屋技法」を支持するのは、おそらく稜つきの削片の存在を一つの論点とするものであろう。しかしながら、五点の細石刃核の全てが「荒屋技法」の所産とする決定的な証拠は必ずしも無いのではなからうか。荒屋遺跡例、越中山S遺跡例ともに、その全てを両面体の素材の分割として考えなければならないとは言いがたいのではなからうか。すなわち、部厚い剥片の主剝離面を細石刃核の打面として設定し、器体側面の調整加工を行って舟底形に仕上げたものとは区別することが困難であるという事実に留意する必要がある。このような場合には、むしろ、先述の大平山元II遺跡の接合例のような製作技術によるもので、Morlanの「ホロカ技法」(Morlan 一九六七)に極めて近似するものといえよう。彫器はいくつかのバラエティをもつが、荒屋型彫器は無い。搔器は角二山遺跡例とはやや異なり、刃部が撥形に広がるものなどが指摘される。また、一点の『広義の東山型ナイフ』(小野 一九七三)が共存すると言われている。

六、山形県越中山M遺跡(加藤・上野 一九七三、加藤 一九七三)

越中山S遺跡とは約二百メートル離れている。細石刃、細石刃核、稜つきの削片、彫器、小形円形の搔器などが採集されている。

細石刃核は両面体の素材を縦割りにした湧別技法によるもので、打面に擦痕はない。細石刃の剝離は、石核の両端で行なわれている。本例では、現打面よりの器体側面の調整は認められないようである。

荒屋型彫器が存在する。

七、山形県湯の花遺跡（加藤・上野 一九七三、加藤 一九七三）

山形県西置賜郡小国町に所在する。『米ヶ森型に近似するナイフ形石器、大形石刃を利用した単打彫刻刀、中形石刃を利用した神山型類似の彫刻刀、搔器など、ナイフ形石器を中心とする石器群』と細石刃石器群が発見されている（加藤 一九七三）。両者が一つの組成をなすものかどうかについては報告者は結論を保留している。

細石刃核は四例が報告されており、全て型式を異にする。

第一例（第一四三）は明らかに湧別技法によって作出されたものである。打面に擦痕を持たない。角二山遺跡に認められたようなスキー状削片の剝離と交互に器体側面の調整加工が行なわれているかどうかは明らかではないが、報文の図でみる限りでは、本例ではそうした調整は行なわれていないと思われる。

第二例は打面に擦痕をもつ細石刃核で器体側面の調整は最初に用意された細石刃核の打面側から行なわれている。

第三例は片面のみ調整加工を施し横断面をD字状に仕上げた素材の一侧縁から削片を剝離し、これを打面とした細石刃核で打面には擦痕があるものである。峠下型細石刃核の諸特徴と近似した部分をもつが、打面に擦痕を有することや、細石刃剝離作業面の特徴は異なる点である。

第四例は板状の削片を素材とし、打面は調整打面である。器体の調整は打面以外は殆んど認められず、細石刃の剝離は素材の削片の末端部でのみ行なわれている。

八、福島県小石ヶ浜遺跡（渡辺他 一九七八）

福島県会津若松市湊町に所在する。『細石刃核二、彫器三、彫器素材一、搔器一、削器一』などが採集されている。細石刃核は大形の舟底形のもので、部厚い大形の削片を素材とし、全体を舟底形に調整しているものと思われる。

この種の細石刃核では例外的と思われるが、細石刃の剝離に先だち、簡単な打面の調整を行なっている点が注目される（第二四八）。

三点の彫器のなかには荒屋型彫器を含んでいる。

以上八遺跡例について石器群の内容をみてきたが、この他に細石刃核に関して若干の遺跡例を追加しておこう。

山形県山屋遺跡（加藤 一九六四）（第一四四）、同越中山D遺跡（加藤 一九五九）（第一四五）、同稻沢山遺跡⁽³⁾（加藤・上野 一九七三）では両面体の素材の一側縁より削片を剝離して打面を作出した細石刃核が発見されている。加藤晋平らは山屋遺跡の細石刃核をオシヨロッコ型としており（加藤晋・畑・鶴丸 一九七〇）、加藤稔、上野秀一もこれを追認しているが、なお検討を要すと考えられる。

山形県越中山E遺跡では、湯の花遺跡例と同様な打面に擦痕をもつ黒曜石製の小形の細石刃核が採集されている（第二四七）（加藤 一九七三）。礫面を一側面に大きく残した部厚い削片を素材としており、打面を作出後に器体側面の調整を行っているものである。

山形県奥土入遺跡の舟底形細石刃核は、湧別技法によるものではなく、打面側からの器体側面の調整が行なわれているものである（第二四二）。

この他、青森県大平山元Ⅲ遺跡からは『半円錐形細石核』の発見が報じられている（岩本他 一九七九）。

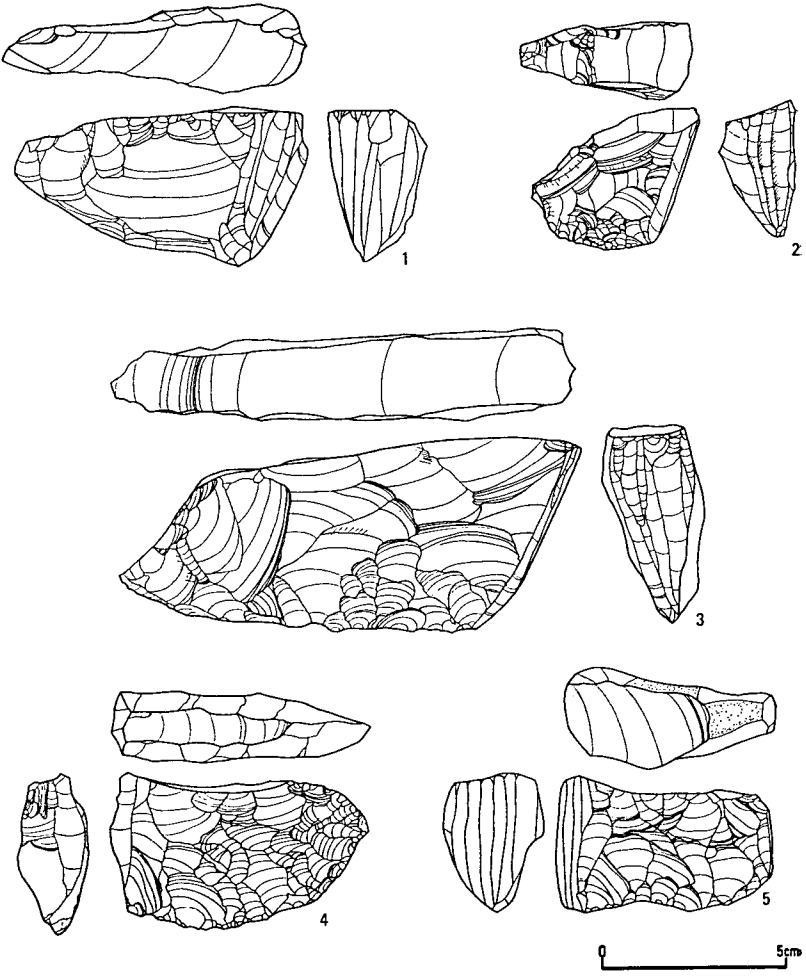
三、東北地方の細石刃核とその剝片剝離技術

前項でみたように、東北地方の細石刃石器群には、いくつかの異なる細石刃剝離技術が認められる。これ等は細石刃核の型的なちがいとしてまとめることができよう。

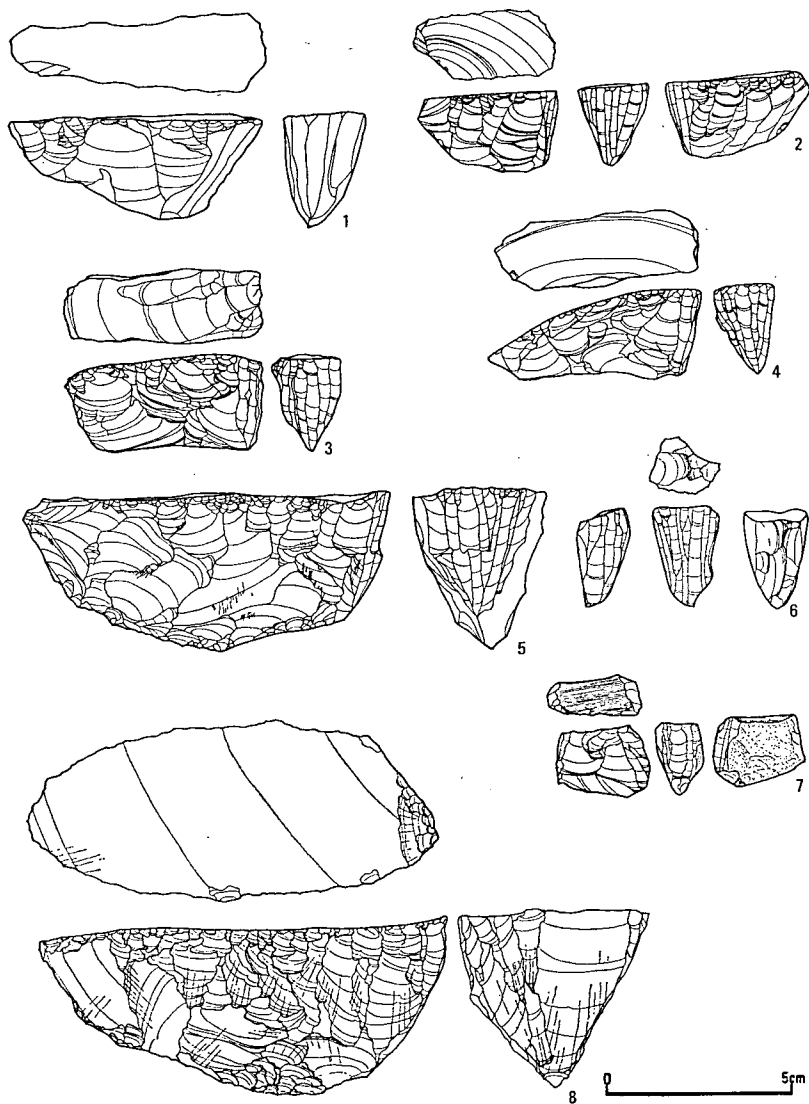
A型 いわゆる湧別技法による細石刃核である。両面体の素材を製作し、その長軸に沿って数枚の削片を剝離することによって細石刃核を製作する。北海道においては、打面に擦痕をもつ白滝型細石刃核と打面に擦痕をもたない札幌型細石刃核とが指摘されているが、東北地方では前者の発見例はない。

角二山遺跡（第一四一・二）、越中山M遺跡、湯の花遺跡（第一四三）などから発見されている。

角二山遺跡例では、削片は通例二〜三枚が剝離されているようで、削片の剝離と交互に器体の調整が行なわれていることが指摘される。白滝型細石刃核には認められない工程であろう。また、札幌型細石刃核にあっても、こうした工程を持たないものがあり、湯の花遺跡例、越中山M遺跡例などがこれにあたろう。



第1図 1・2: 角二山遺跡, 3: 湯の花遺跡, 4: 山屋遺跡, 5: 越中山遺跡



第2图 1: 奥土入遺跡, 2~4: 越中山S遺跡, 5: 大平山元II遺跡
6: 角二山遺跡, 7: 越中山E遺跡, 8: 小石ヶ浜遺跡

ここでは角二山遺跡例をA1型、湯の花遺跡、越中山M遺跡例をA2型としておこう。

A2型としたものでは、剥片剝離技術を検討する充分な資料が提示されていないが、A1型とした角二山遺跡例では、稜つきの削片、スキー状削片をはじめ、細石刃の製作に關係する資料が豊富である。角二山遺跡例に見る限りでは、打面の再生は行なわれていないようである。一方で、細石刃剝離作業面の部分的な再調整、あるいは更新が行なわれることがある。越中山M遺跡例では石核の両端で細石刃の剝離が行なわれている。

なお、山形県月山沢遺跡（上野 一九七二）の細石刃核も札滑型の範疇に含まれよう。

B型 A型と同じく両面体の素材を製作し、この長軸に沿って削片を剝離し打面を作出する点は同じであるが、削片の剝離が素材の長軸の全長に及ばないものをB型とする。

山屋遺跡例（第一四四）、越中山D遺跡例（第一四五）などである。オシヨロッコ型細石刃核との類似が強調されているが（加藤・畑・鶴丸 一九七〇、加藤・上野 一九七三）、稻沢山遺跡例を含めて、再検討されるべきであろう。オシヨロッコ型細石刃核は打面が素材の長軸に対してやや角度がある場合が多く、山屋遺跡、越中山D遺跡例などとは異なるようである。また、細石刃剝離作業面の特徴もやや異なる。私見では、あえて、オシヨロッコ型細石刃核とせず、両例ともA型からの変化したものの一例と考えておきたい。

C型 両面体の素材を製作し、これを長軸を境として二分割し、分割した両者、もしくは、任意の一方を細石刃核とするもので、通常は分割面より器体側面の最終的な調整が加えられるもので、いわゆる荒屋技法（大塚 一九六八）である。

加藤稔、上野秀一らによれば、越中山S遺跡例（第二四二・三・四）が荒屋技法によるとされる。しかしながら、両氏も指摘されるように、後述するD型との区別は非常に困難であろう。

明治大学蔵の荒屋遺跡の細石刃核の観察からは、素材を必ずしも両面体のものと考えなくとも、比較的大きな石核状のもの稜を含む一端より断面三角形の部厚い削片を剝離し、これを素材とする可能性が考えられる。この場合には、細石刃核の打面の剝離方向は必ずしも一定しないし、ポジティブな剝離面を打面とすることもあることが分る。筆者は荒屋技法を全く否定するという考えはないが、稜つきの削片の存在を強調して、荒屋遺跡、越中山S遺跡例

などの全てを荒屋技法によるものと決論づけることには必ずしも賛成できない。

D型 部厚い剝片を素材として、その主剝離面を細石刃核の打面として設定する。次いで、この打面及びその反対側より細石刃核の全周を調整し舟底形に仕上げるものである。モーランが舟底形石器の製作技術として措定したホロカ技法 (Morlan 一九六七) に共通する。ただし、剝片上に描かれる細石刃核の打面の輪郭は必ずしも剝片末端部に置かれるとは限らない。太平山元Ⅱ遺跡の接合例にみるように、しばしば剝片の打瘤部付近を含むことがある。前述のように、剝片の長軸上に細石刃核の長軸の輪郭が描かれた場合には、特に荒屋技法による細石刃核と区別することが難かしいことが予想される。

C型・**D型**を含む石器群としては、奥土入遺跡(第二図一)、越中山S遺跡(第二図二・三・四)、太平山元Ⅱ遺跡(第二図五)、小石ヶ浜遺跡(第二図八)などがあげられ、特に後二者は細石刃核がかなり大形であることが注意される。

E型 **D型**と同様に打面の作出が先行する細石刃核で打面に擦痕をもつものがある。越中山E遺跡(第二図七)、湯の花遺跡例の二点があり、打面に擦痕を有する点で、白滝型細石刃核との関係が指摘されている(加藤・上野 一九七三)。

F型 **E型**と同じく、打面に擦痕をもつ細石刃核が湯の花遺跡よりも一例報告されているが、これは、片面調整の素材の長軸にそって一辺から削片を剝離し、これを打面とするものである。峠下型細石刃核と類似したものであるが、峠下型細石刃核では通例打面は擦痕をもたないなど相違点も多い。

G型 いわゆる「半円錐形細石核」と呼ばれるもので、剝片もしくは小形の礫を素材として、打面の作出→器体の調整→打面調整→細石刃の剝離という工程をとるものである。打面はしばしば再生または転移を行なう。大平山元Ⅲ遺跡、大台野遺跡、角二山遺跡(第二図六)、湯の花遺跡などで発見されている。西南日本の細石刃核と同じものとみるか、北海道における円錐形細石刃核と関係するものか速断できないが、前者の可能性がより高いものである。本州北半における舟底形細石刃核の分布の南縁部では、しばしば両者が共存していること、北海道における円錐形細石刃核とは剝片剝離技術に関して、やや異なる点が指摘できるなどの点からみて、こうした理解の妥当性がある。

四、東北地方の細石刃石器群と二・三の問題

東北地方の細石刃石器群は津軽海峡を越えて、北海道の細石刃石器群と深いつながりのあることは明らかである。北海道の細石刃文化に関しては、湧別技法をもつ石器群と、峠下型細石刃核、オシヨロッコ型細石刃核、以上によらない舟底形細石刃核のそれぞれを含む石器群、さらに円錐形細石刃核をもつ石器群が指摘される。それぞれの石器群は必ずしも排他的な様相は示さず、かなり複雑な組み合わせを呈している。オシヨロッコ型細石刃核を含む石器群が他に比べ相対的に新しいことには異論はないようであるが、他についてはいくつもの異論がある。また、湧別技法の二者について札幌型→白滝型の編年が提示されている(吉崎 一九七三)。

筆者は、湧別技法と峠下、オシヨロッコ両型式の細石刃核の製作技術の關係は、後者が前者よりの変質、改良によるものであるという立場を支持したい。札幌K遺跡(桑原 一九七五)、置戸安住遺跡(戸沢 一九六七)などの湧別技法によらない舟底形細石刃核については、多面体彫器、置戸型尖頭器などとの共伴などからみて、他の湧別技法による細石刃核をもつ石器群よりやや新しい段階に編年されよう。ちなみに、筆者は各細石刃製作技術の変化は、それぞれが排他的な形で完全に交替するとは予測しておらず、湧別技法による細石刃核を含む石器群に他が加わってゆく形で漸移的な変化をするものと考えている。湧別技法の完全な消滅は、蘭越型細石刃核、オシヨロッコ型細石刃核の段階に至ってからであろう。

東北地方での変化も、こうした北海道での変化に基本的には対応しよう。

東北地方における湧別技法を持つ石器群は、その量の多少を問題としなければ、角二山遺跡、湯の花遺跡、越中山M遺跡、越中山S遺跡に認められる。隣接地域では、新潟県では荒屋・中土・月岡の各遺跡、茨城県後野遺跡などに及ぶとみられる。

ただ、越中山S、荒屋の各遺跡では、湧別技法による確実な細石刃核は出土しておらず、断面三角形の稜をもつ削片、あるいはスキーク削片と思われるものなど湧別技法の片鱗と思われるものが発見されているにとどまり、確実とは言い難い。

北海道について述べた細石刃剝離技術についての考え方を敷衍すれば、前記のB型、C型、F型の細石刃核、その剝片剝離技術は湧別技法(A型)の変化したものと捉えられよう。また、E型については、打面の調整が擦痕によるものであり、白滝型細石刃核における技術の部分的な受容とみることができるとはなからうか。

D型の位置づけについては確証し難いものの、北海道の二・三の例、C型の荒屋技法との関係よりみて、札幌型細石刃核と規定した角二山遺跡などのA型より後出とみてよいであろう。東北地方でのD型の成立が全てホロカ技法の受容ということであるのかどうかについてはなお検討されるべきであろう。角二山遺跡例における細石刃核の打面より器体側面への調整とC型、D型における器体側面の調整のあり方とを考えれば、D型の成立について、北海道におけるホロカ技法の全面的な受容という見方以外に、A型と小林達雄のいう『システムB』(小林一九七〇)との両者の相互の影響下で成立したとすることも考え得る可能性がありはしまいか。

E型については前記の如く、打面の調整に関しては白滝型細石刃核との関係が考えられるが、器体の調整についてはD型との関係が考えられよう。

以上、またように東北地方の細石刃石器群は基本的には北海道の細石刃石器群と類似した様相が認められるものの、共伴する他の石器類に関しては、かなりの差異が認められる。特に著るしいのは、尖頭器が殆んど認められないことと、彫器のバラエティが乏しいことなどである。細石刃石器群の基本的な組成については、北海道の諸例との異同を注意しなくてはなるまい。

東北地方の細石刃石器群の編年については、細石刃製作技術についてみれば、舟底形細石刃核については、A型が最も初期のもので、B・C・E・F型はより後出のものである。D型についてはA型との関係を確認し難いが、大平山元II遺跡下層が湧別技法と関係するものであり、上層がD型細石刃核を含むものとするならば、ここに一つの例を見出せようか。類例の増加をまって検討しなくてはならないであろう。

以上のように、細石刃核の型式についてみれば角二山遺跡例、越中山S遺跡例の編年が呈示できよう。しかしながら、両者の石器組成の差ほどには、両者の年代に隔りを大きく考える必要はないものと考えている。また、G型の細石刃核は西南日本に一般的な「野岳休場型細石核」(鈴木一九七二)に連なるものであろう。年代的には、角二山

遺跡での共伴例からみて、東北地方の細石刃石器群の初期に求められるが、現状では両者の明確な関係に言及することは困難であろう。

東北地方の細石刃石器群とその文化を語るには、なお、資料的な制約が大きい。近年の隣接地域での調査の進展は目ざましいものがあり、舟底形細石刃核をもつ石器群の広がり、従来の知見を大きく修正されようとしている。これ等の石器群には湧別技法もしくはその変化したものを内容とするもの、C型もしくはD型の細石刃核をもつものなどがあるが、いずれも東北地方での石器群のあり方と同様のように思われる。

本稿を草すにあたり、加藤藤氏ならびに致道博物館の酒井忠一氏には大変お世話になった。記して深く感謝申し上げたい。また、山形大学歴史学研究所の諸氏にも種々御世話いただいた。あわせて、感謝申し上げる。

註

(1) 所謂「小形ナイフ形石器」として、山形県法師森遺跡の石器群がある。また、近年秋田県米ヶ森遺跡より発見された「米ヶ森型台形石器」が注目されよう。両者ともに幾何形の細石器とは全く異なるものではあるが、ナイフ形石器群の変化に係して、細石刃石器群との関係に何らかの示唆を与える存在である可能性は否定できない。とくに、米ヶ森遺跡における細石刃との共伴の可否をめぐって問題となろうか。本稿では一応両者ともに細石器とは認めず論を進めておく。

(2) 新聞報道によれば、細石刃の出土例があるとされていた。

(3) 有茎尖頭器を素材とするが、彫器の可能性もある。

(4) 茨城県後野遺跡、東京都狭山B遺跡、千葉県復山谷遺跡などがある。

文 献

岩本義雄・天間勝也・三宅徹也・鈴木克彦 一九七八「蟹田町大平山元遺跡発掘調査概報」『青森県立郷土館調査研究年報』第四号

岩本義雄・三宅徹也・近藤裕弘 一九七九『大平山元I遺跡発掘調査報告書』『青森県立郷土館調査報告』第五集・考古―上野秀一 一九七一「後期旧石器時代末葉における東北地方と北海道の交流について——山形県角一山遺跡をめぐって」『山大

史学』四

宇野修平・上野秀一 一九七五「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』二 遺跡と遺物（上）

後野遺跡調査団編 一九七五『後野遺跡』

小野一彦 一九七三「最上川・赤川流域における細石刃文化——とくに湧別技法を有する細石刃群の検討」『工藤定雄教授還暦記念論文集』

記念論文集』

大塚和義 一九六八「本州地方における湧別技法に関する一考察」『信濃』第二〇巻第四号

加藤晋平・畑宏明・鶴丸俊明 一九七〇「エンド・スクレーパーについて——北海道常呂群端野町吉田遺跡の例」『考古学雑誌』

第五五巻第三号

加藤 稔 一九五九「資料・庄内・越中山A地点の石器群」『考古学手帖』第七号

加藤 稔 一九六四『山屋・東山遺跡』

加藤 稔 一九七一「山形県角二山発見の細石器文化」『日本考古学協会第三七回総会研究発表要旨』

加藤 稔 一九七二「山形県東田川郡朝日村越中山S遺跡出土の細石器」『山形考古』第二巻第一号

加藤 稔 一九七三「東北地方の旧石器文化（後編）」『山形県立山形中央高等学校研究紀要』第三号

加藤 稔 一九七五「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』二 遺跡と遺物（上）

加藤稔・上野秀一 一九七三「東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について」『北海道考古学』第九輯

菊地強一 一九七五「大台野遺跡」『日本の旧石器文化』二 遺跡と遺物（上）

小林達雄 一九七〇「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』一六

芹沢長介 一九五八「細石器問題の進展（その二）」『貝塚』八二

芹沢長介 一九五九「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』第一巻第五号

芹沢長介 一九六二「日本の旧石器文化と縄文文化」『古代史講座』二

芹沢長介 一九六三「無土器文化の地方色」『国文学の解釈と鑑賞』二八一—五

芹沢長介・吉崎昌一 一九五九「アイヌ以前の北海道」『科学読売』一一—五

滝沢 浩 一九六四「本州における細石刃文化の再検討」『物質文化』三

桑原 護 一九七五「札滑遺跡」『日本の旧石器文化』二 遺跡と遺物（上）

- 富樫泰時・白石建雄・村岡百合子・藤原妃敏 一九七七『米ヶ森遺跡』
- 戸沢充則 一九六七「北海道置戸安住遺跡の調査とその石器群」『考古学集刊』第三卷第三号
- Morlan, Richard E. 一九六七「The Preceramic Period of Hokkaido: An Outline,」ARCTIC ANTHROPOLOGY, VI
- 吉崎昌一 一九六三「文化遺物、本州および大陸の中・旧石器文化との対比」『白滝遺跡の研究』
- 吉崎昌一 一九六一「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』第二六卷第一号
- 吉崎昌一 一九七三『タチカルシュナイ遺跡 一九七二』
- 吉田格・肥留間博 一九七〇「狭山・六道山・浅間谷遺跡」『東京都瑞穂町文化財調査報告 一』
- 渡辺直登編 一九七七『シンポジウム・日本旧石器時代の考古学』
- 渡部光一・渡部聖史・芽賀英一・星将一・中村五郎 一九七八「会津若松市小石ヶ浜遺跡」『福島考古』第一九号